

交通バリアフリー基本構想策定におけるワークショップ方式による住民参加に関する報告*

A Report of a Process to Establishment of a Master Plan for Transportation Barrier-free *

轟 修**・山本幸久***・新田保次****・三星昭宏*****

By Osamu TODOROKI**・Yukihisa YAMAMOTO***・Yasutsugu NITTA****・Akihiro MIHOSHI*****

1. はじめに

平成12年に施行された「高齢者、身体障害者等の公共交通機関を利用した移動の円滑化の促進に関する法律」（以下、交通バリアフリー法という）では、当事者参加によって各自治体が重点整備地区の基本構想をとりまとめるよう求められている。交通バリアフリー基本構想の策定における当事者参加の意義の一つは、個別箇所における移動制約要因を特定することである。

本稿は、大阪府北部の豊中市における住民参加による交通バリアフリーの基本構想策定の経緯を報告するものである。豊中市では「豊中市交通バリアフリー基本構想検討委員会」を中心にアンケート調査やヒアリング調査を行っているが、これに加えて、まちづくり等で実績の多いワークショップ型式でも策定作業を行っている。

以下に、これらワークショップの内容や進行の流れなど運営方法の概要を紹介し、ワークショップ参加者の感想などから、運営の課題についても言及する。また、アンケート調査とヒアリング調査の概要、ニュースレターやホームページ等の広報活動の概要についても報告する。

*キーワード：交通バリアフリー，住民参加

**正員，工修，株式会社 オリエンタルコンサルタンツ
(東京都渋谷区渋谷1-16-14，
TEL: 03-3409-7551，E-mail: todoroki@oriconsul.co.jp)

***非会員，豊中市土木部道路建設課
(大阪府豊中市中桜塚3-1-1，TEL: 06-6858-2364)

****正員，工博，大阪大学大学院工学研究科土木工学専攻
(大阪府吹田市山田丘2-1，TEL: 06-6879-7609，
E-mail: nitta@civil.eng.osaka-u.ac.jp)

*****正員，工博，近畿大学理工学部土木工学科
(大阪府東大阪市小若江3-4-1，TEL: 06-6721-2332，
E-mail: toshi_jm@civileng.kindai.ac.jp)

2. 対象地区の概要

豊中市は大阪府の北部に位置し、千里ニュータウンを有するなど大阪都心部の郊外都市として発達してきた。人口は約39万人、市域面積は約37km²で、65才以上の高齢化率は約15%である。また中心部の豊中地区では、住民主体のまちづくりとして先駆的な試みがされている¹⁾。

対象地区は市の東部に位置し、北大阪急行電鉄緑地公園駅を中心とした約48haの広さの地区である。当地区は、昭和40年代の千里ニュータウンの開発にあわせて人口が急増し、現在では地区内人口は約8,500人で高齢化率は9%となっている。丘陵地を切り開いたまちでもあるので、地区全体は坂の多いまちになっている。

3. ワークショップの内容

(1) ワークショップの概要

ワークショップは、平成13年10月から平成14年3月にかけて、計6回の開催となっている。

(a) 参加者

ワークショップでは、定員等の制限を設けず、また参加者を固定しない方法としたため、その都度、参加を呼びかけることとした。参加告知の方法は、広報誌、ちらし、ホームページ、ニュースレター、委員会の構成メンバーなどを通じて参加を呼びかけた。また鉄道や道路などの事業者には毎回、実務担当レベルの職員の参加を呼びかけた。

結果として各回とも市民が30から40人程度、事務局も含めた事業者が20人前後の参加があった。

(b) 進め方

所要時間は各回とも約3時間程度で、進行の流れは、概ね 事務局からの案件の説明(約1時間)、班別に分かれての議論(約90分)、議論の発表(3

0分程度)であった。1班あたりの規模は10人程度で、障害者、地元住民、事業者、事務局で構成されるよう参加者を割り振った。また司会、書記を各班で定め、各班の議論の様子を発表は司会が行うという形にした。

以下に各回の開催日時、参加者数、主な内容を示す。なお開催時間は各回とも平日午後であった。

第1回ワークショップ「交通バリアフリーって何？」

開催日：平成13年10月29日

参加者：52人

主な内容：これまでの経緯 / 「交通バリアフリーについて」の講演 / 緑地公園駅地区の概要 / 交通バリアフリーの構造基準 / 移動の際、困っていること等の意見交換 / 介助の方法や簡単な手話講習



図 - 1 ワークショップの様子

第2回ワークショップ「歩いてみよう！」

開催日：平成13年11月16日

参加者：138人

主な内容：緑地公園駅地区の現地点検調査

第3回ワークショップ「どこが悪いの？」

開催日：平成13年11月27日

参加者：72人

主な内容：バリアフリーに関する意見交換 / 緑地公園駅地区の問題点・課題に関する意見交換

第4回ワークショップ「どうしようか？」

開催日：平成14年1月16日

参加者：63人

主な内容：緑地公園駅地区の動向（駅構外のエレベーター計画、駅構内のエレベーター計画、服部緑地公園のバリアフリー化計

画、複合福祉施設の計画） / 改善案に関する意見交換

第5回ワークショップ「こうなればいいな！」

開催日：平成14年1月29日

参加者：57人

主な内容：豊中市交通バリアフリー基本構想の構成 / 音声誘導装置 / 取組の方向に関する意見交換

第6回ワークショップ「これでいいのか？」

開催日：平成14年3月6日

参加者：59人

主な内容：構想(案)の公開討論会

(2) ワークショップの内容

(a) 初回

参加者にとって、ワークショップそのものが初めてであることから、緊張をほぐすことと、ワークショップの主旨を理解してもらうことに力点を置いた。具体的には30分程度のバリアフリー講演会、グループ毎で各人が移動の際に困っていることを話し合った。また「お手伝いしましょうか」をキーワードに車いす、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由それぞれの方に手伝って欲しいことを聞き、同時に介助の方法を実演した。また簡単な手話講習会も行うなどして、参加者相互の理解を進めた。

参加者には特に介助方法の実演、手話講習会が好評であった。

(b) 現地地点検調査

調査自体の目的は、当事者に道路や駅舎等の施設の構造上の欠陥を発見してもらうことであったが、当日は事務局を含めると130人を超える参加があったことから、事務局としては、参加者全員の安全確保を第一に考えた。また健常者が障害者と一緒にまちを歩くことで、障害者が日常、感じている障害を共感することに力点を置いた。また会場近くの駐車場でノンステップバスの試乗会を行い、イベント的な要素も加味した。

調査時間は、参加者の身体的負担を考え、1時間程度に抑えることとした。結果として多数の参加者であったこともあり、調査ルートは10班9コースとなった。

事前に事務局でガイドライン等に従って現地を

踏査・点検調査を行い、おおよその問題点を把握していたつもりだったが、今回の現地点検調査によって、例えば「左利きの方は自動改札機への切符の投入がしにくい」などガイドラインに含まれない多くの指摘が明らかとなり、課題発見がより精緻なものになったと評価している。

また調査日だけでは点検事項を振り返るには時間不足であったため、回を改めて、調査内容を振り返ることとした。この時、他のルートの調査状況を全参加者に知ってもらうため、調査状況のダイジェストをまとめたビデオを上映した。また調査時の指摘事項を地図にまとめたものを配布した。

(c) 関連する地区内外の動向情報の提供

地区内外での関連する事業を、情報としてワークショップ参加者に伝えることが重要と考え、地区内の予定事業や豊中市内で実験中の歩行者支援システムについて説明を行った。このうち、歩行者支援システムについては、地元のケーブルテレビが制作したビデオを活用した。

地区内の各事業の説明の後、テーブル毎で議論してもらったことで、その場で説明の不明な点、論点が明らかとなった。

この議論の中から、元々はイレギュラーな規格として採用していたエレベーターのウォークスルー型が、高い評価を得ていることがわかった。また予算執行の関係からエレベーターの規格を最小にしていたが、より余裕のある規格へと引き上げることなどが、会議の具体的な成果となっている。

また参加者の中から、視覚障害者団体が取り組んでいる音響設備の改善例（指向性スピーカー）のデモンストレーションの企画が持ち込まれ、参加者相互の情報交換の場にもなってきた。

(d) パブリックコメントの一環としての公開討論会

パブリックコメントとして広報誌、ホームページで意見募集を呼びかける一方で、ワークショップの一環として、基本構想案の説明と質疑を含めた「公開討論会」を行った。

公開討論会と言う型式にしたことで、その場で出された意見の趣旨を確認できる点など、パブリックコメントの方法として、実務的に見ても興味がある結果となった。

(e) 参加者の感想

ワークショップの初回と第6回(年度最終回)に参加者に対してアンケートを行い、ワークショップについての感想を求めた。

表-1 ワークショップに参加してよかった理由

項目	回答数
1. 自分の意見を話できたから	17
2. いろいろな立場の人の話が聞けたから	29
3. 計画づくりに参加できたから	10
4. 市の計画が聞けたから	16
5. 交通バリアフリーに興味があったから	8
6. 自分が住んでいる地区のことだから	10
7. その他	0

*)回答数30

表-1は第6回のアンケートの一部である。これから明らかなように「いろいろな立場の人の話を聞いた」点をよかったとしている。また半数以上が今後もワークショップがあれば参加したいと答えている。また「今回のバリアフリーの企画、検討、構想の中での参加、そして自由に個人の立場で意見が言えたことは、とても有意義でした。」「今まで、気づかず何気なく生活してましたが、交通バリアフリーワークショップに参加させて頂きまして、とても勉強になりました。」など概ね好評であった。

(f) 運営の課題

上記のアンケートでは同時に、ワークショップの運営についても聞いている。各回は概ね3時間程度であったが、これについては「ちょうど良い(66%)」であった。また開催日は平日の昼間であったが、これについても83%が良しとしていた。しかしながら「より多くの人にも参加できるには、他の時間帯や休日にもバラエティーに富んだ方がいい。」との指摘もあった。また「事務局の挨拶、案説明はもっと時間を短縮し、議論の時間を長くした方がいい。」「ワークショップの案内に当日の時間割を書いて下さい。」「資料に前回の発表内容や、今後の活動等を入れて下さい。」などの指摘もあった。

なお点字資料は、市の障害福祉セクションに点訳作成をしてもらっているが、各回共に資料の脱稿がワークショップ前日と言うことが多く、後日に参加者へ送付している点など、運営についての課題も少なくない。

4. その他の市民意見の反映

(1) アンケートの実施

平成13年10月から11月に全般的な傾向を把握するためにアンケート調査を実施し、151人から回答を得ている。

その結果として、例えば道路におけるバリアとして、「路上駐車」と答えている人が圧倒的に多くあった。次いで歩道の狭さ、段差、路面の状態、傾斜についての指摘が多くなっていた。また駅ではエスカレーター、エレベーターへの不満が多くなっていた。

これらのアンケート結果についてもワークショップで報告され、議論の参考にされた。

(2) ヒアリングの実施

アンケートとは別に 知的障害児の親(手をつなぐ親の会)、外国人、オストメイトにヒアリングを行った(なおワークショップにも参加をお願いしている)。

調査は、2～3人の対象者に「外出する際に困ること」を中心に自由に話してもらおうという形をとった。当初は1時間程度を予定していたが、大きく時間を延長することがあった。

5. 市民への活動の広報

豊中市交通バリアフリー基本構想検討委員会では、ワークショップを含む市のバリアフリーに関する活動を広く市民に知らせる必要があるとの意見が相次いだ。そのため、市の広報誌、ケーブルテレビに加え、委員会事務局独自の媒体としてニュースレターの発行とホームページの開設を行った。

(a) ニュースレターの発行

平成13年10月1日にニュースレター「とよなか交通バリアフリーニュース」第1号を発行し、平成14年5月22日現在で第12号まで発行している。なお全号とも点字版を発行している。ニュースレターはワークショップなどの機会を通じて配布している。また委員からの要望で、第7号以降はルビ付きの大型版(A3サイズ)を発行している。

(b) ホームページの開設

市のホームページ(<http://www.city.toyonaka.osaka.jp/>)に平成13年10月24日から「交通バリアフリー基本構想情報サイト」を設けている。

(c) 広報による告知など

市民委員の公募、意見の募集、ワークショップの開催を逐次「広報とよなか」で告知している。

6. おわりに

当事者が直接に話し合うワークショップ方式は、より具体的に個々の案件の仔細を把握する上で有効と考える。今回、豊中市で実施されたワークショップにおいてもアンケート調査や事前のガイドライン等の調査項目で明らかとなった課題を追認すると同時に、数多くの問題点や課題を把握することができた。

これにより、当初の目的である当事者の意向を反映した基本構想の策定が行えたと考える。

またワークショップ方式のように参加者が自由に話し合うことで、関係者相互の理解が進んだと考える。これは参加者へのアンケート調査からも、ほとんどの参加者が今回のワークショップの「よかった点」としてあげている。

バリアフリー化を考える上で、ややもすると「基準を守っていればよし」とする基準値主義に陥りがちで、その基準が生まれてきた背景に考えが及ばなくなりがちである。当事者からの声を聞くことで「なぜ、そうした配慮が必要か」が理解でき、事業者が基準規定でなく、性能規定へと理解が広がる点にも意義があったと考える。

様々な背景を持った人々が一堂に会して議論し合う姿は、インテグレーション(統合化)思想を具現化したものとも位置づけられ、ワークショップの開催そのものがバリアフリーの第一歩となりうることを指摘して、まとめとしたい。

参考文献

- 1) 田中晃代、久隆浩：住民主体のまちづくりプロセスの体系化とまちづくりの段階別にみた支援方策のあり方に関する考察 豊中駅前地区まちづくりを事例として、日本都市計画学会学術研究論文集、No.34, pp.319-324, 1999. 10